

ときえだもとき

時枝誠記著「国語学言論 続篇」岩波文庫、岩波書店 2008年3月14日刊を読む(II)

言語過程説の基本的な考え方

1. はじめに

言語は、人間即ち言語主体の精神、生理、物理的過程現象である。このような言語の研究は、言語観察者の主体的体験を内省観察することによって成立する。

2. (1)言語は、思想の表現であり、また、理解である。思想の表現過程及び理解過程そのものが、言語である。
 - (2)①言語が、思想の表現、理解であると云っても、すべての思想の表現理解が、言語であるのではない。
 - ②絵画や音楽も、思想の表現理解である。
 - ③言語は、音声(発音行為)或は文字(記載行為)を媒介とする表現過程である。
 - ④同時に、音声(聴取行為)或は文字(読字行為)を媒介とする理解過程である。
 - (3)①言語は、従って、人間の行為、活動、生活の一に属する。
 - ②言語を行為する主体を、言語主体と名づけるならば、言語は、言語主体の実践的行為、活動としてのみ成立する。
 - ③このことは、具体的には、言語は、個人においてのみ成立することを意味する。
 - (4)①言語は、表現の場合には、理解主体(聞手、読手)を予想し、理解の場合には、表現主体(話手、書手)を前提とする行為である。
 - ②独白は、話手が同時に聞手となる特別の場合である。
 - (5)①言語行為が成立するためには、必ず、ついて語られる何もの(素材、話題の事柄)かが、必要である。
 - ②言語において、話手、聞手、素材を、言語の成立条件という。
 - (6)①言語行為は、その媒介が、音声であるか、文字であるかに従って、「話すこと」「聞くこと」「書くこと」「読むこと」の四の形態のいずれかにおいて成立する。
 - ②第四項の事実を、考慮に加えるならば、「話すこと」は、「聞くこと」を予想し、「書くこと」は、「読むこと」を前提とし、また、それぞれに、その逆である。
 - (7)言語は、そのいずれの形態においても、言語主体の実践的行為であるから、表現には、表現の技術を、理解には、理解の技術を不可欠とする。
 - (5)言語を行為し、実践する立場を、主体的立場といい、言語を観察し研究する立場を、観察的立場というならば、言語を研究するということは、言語を行為し実践する主体的立場を観察することに他ならない。
3. (1)言語は、人間行為の一として観察し、すべてを、言語主体の機能に還元しようとする。
 - (2)言語は、その本質において、人間の行為の一形式であり、人間活動の一であるとする時、何よりも肝要なことは、言語を、人間的事実の中において、人間的事実との関連において、これを観察するということである。

<コメント>

言語とは何かを考えた時枝先生の「国語学原論」の考え方のエキスがよくまとまっている。「言語学としての国語の古典中の古典の一冊」国語を教える先生は、是非、御一読を。

— 2016年2月22日(水) 林 明夫記—